

対象学年・単位：1～3学年・各1単位

企画担当：研究研修部

授業担当：全教員を対象に割り当て（学年団、担任によらない）

学校data

1956年創立／普通科・商業科・情報ビジネス科／生徒数538人（男子251人・女子287人）／進路状況（2014年度実績）大学27人・短大20人・専門学校82人・就職73人・その他3人

★平成26・27年度山梨県キャリア教育推進実践研究校

塩山高校（山梨・県立）

Report 01

全教員で生徒の課題点を共有し、
将来担っていく地域社会を舞台に
3年間、生徒主体の探究活動を繰り返す

全校をあげて取り組む
キャリア教育の重要な柱

塩山高校はキャリア教育に力を入れてきた学校だ。生徒は素直で明るい、自主性・積極性に欠けたり、自信をもって行動できない面も見られる。「そんな生徒の姿から教員が必要を感じ、自然な流れでキャリア教育に取り組んできた」と武藤秀樹教頭。高校卒業後すぐ就職する生徒への切実な思いも後押しし、社会で強く生きる生徒を育てようと、学校活動全体でキャリア教育を推進している（下図）。

「総学」は、同校のこのキャリア教育において、教科や特別活動等と並ぶ重要な柱のひとつだ。「社会に生きる」を大きなテーマに掲げ、積極的に校外に出て探究活動を繰り返し、3年間で段階的に社会とのかかわりを深めていくプログラムを実践している。毎年その時の生徒の状況から年度重点目標を設定し、さまざまな研究指定の機会も活用しながら新聞記事を使った学習（NIE）や金融教育を取り入れるなど、プログラム改善を重ねてきた。

地域課題に取り組んだ経験が
自信や主体性につながった

昨年度を例に、学年ごとに「総学」の実践を見てみよう（図1）。1学年のテーマは「社会を知る」だ。前半は新聞記事の活用や地域の博物館・美術館等の見学を行い、地域について教科横断的に学習。後半は講演会や体験講座などで興味をもった職業の調査・発表会を行った。2学年は「社会の仕組みを学ぶ」がテーマ。社会とのかかわりの中で自分の将来に目を向けることを目的とし、社会で活躍している人にインタビュー。その内容は個人および班でまとめて発表した。3学年「社会の中で生きる」のメインは、「こども」「情報」「介護・福祉」などの講座別に行う課題解決型学習だ。各講座で4～5人の班を作り、課題発見から解決策の考案、実践まで、生徒が力を合わせて主体的に取り組んでいる。

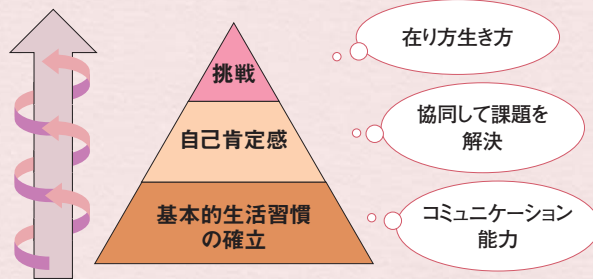
例えば「地域」講座では、6班に分かれてそれぞれ「山梨の観光とおもてなし」について検討（図2）。ある班は、2月に観光客が減少する点に着目し、「山梨の星の魅力をもとに冬の旅行プランが

塩山高校の「総学」の位置づけ

塩山高校のキャリア教育グランドデザイン

塩山高校が育成する生徒像

粘り強く学習や部活動に取り組み、クラスの仲間や教員との関係を良好に保つ中で、社会的な課題や自分の将来について考えることのできる生徒。



総合的な学習の時間「社会に生きる」
1年 社会を知る
2年 社会の仕組みを学ぶ
3年 社会の中で生きる

教科
国語・地歴公民
英語・商業・情報
断片をつなぐ
芸術・家庭保健体育
数学・理科

特別活動等
・インターシップ
・道徳教育
・防災教育
・理数教育
・部活動、委員会活動

地域との連携



教頭
武藤秀樹先生



研究研修部主任
古守やす子先生

取材・文／藤崎雅子

できないか」と考えた。県立科学館の天文アドバイザーへの取材や文献調査、アンケート調査などを行い、「パレンタインデー」に星を観るバスツアーを考案。これを山梨県観光部に提案し、採用された（写真）。このほか、「甲州ワインを日本に

広める」「自然災害時の観光客の安全対策」などに取り組んだ班も同様に提案し、県の担当者をうならせた。こうした一連の課題探究プログラムは、生徒に良い影響を与えているようだ。4月と12月に実施している生徒アンケート



図2 テーマ別講座学習のプロセス(2014年度「地域」講座の例)

日時	学習過程	学習活動
5月6日	課題設定	理想の未来の山梨像を描き、現状把握をする。それらと比較することから、山梨の観光やおもてなしに関する課題を明らかにする。班編成をする。
5月20日		山梨県観光課外部講師による山梨のおもてなし講演会。ブレインストーミング、KJ法で課題の抽出をする。
6月3日	情報の収集	班ごとにテーマを確定し、目標や仮説の設定、具体的な行動計画を立てる。
6月10日		地元宿泊施設取材、電話取材、アンケート作り、文献調査等
6月17日		地元醸造家取材、消防署取材、電話取材等
7月1日	整理・分析	収集した情報の集計をし、マトリクス法などの方法で整理する。整理したデータをもとに課題解決の方向性の検討と、中間発表の準備をする。
7月3日	まとめ・表現	中間発表会を行い、外部講師、山梨県観光部、校長、教頭の助言と生徒同士の相互評価をする。
7月16日	再検討	自分の班の中間発表の様子をビデオで見て振り返る。プレゼンミニ講座で改善点を明確にさせ、計画の再検討をする。
夏期休業	実践	班別活動(県立科学館でパンフレットの配布とアンケート調査、CMの制作、保育園等での紙芝居の実践など)
8月26日	まとめ・表現	進捗状況の確認と発表資料のまとめをする。レジメの提出をする。プレゼンテーションで話す内容の確認をする。
8月30日		下級生、校内の教員等の前でリハーサルを行う。
9月1日		山梨県庁にて、県観光課や県教育委員会などへ「山梨の観光とおもてなし」についての提案をする。
9月9日		600字程度の意見文を書く。活動の振り返りをする。

生徒の取り組みがもとで立派な観光ガイドブックが作られた



「地域」講座では、フィールドワークやアンケート調査をもとに、県観光部に地域課題解決策をプレゼンテーション

図1 「総学」の主な取り組み

学年	テーマ	目標	主な取り組み
1年	社会を知る	社会を知り、自己の進路を考察する	○新聞を活用し、社会を知る(グループで意見交換、地域活性化意見文作成、発表など) ○地域を知り、自己の進路を考える(博物館・美術館・文学館見学、職業体験講座、希望別大短専就職訪問など)
2年	社会の仕組みを学ぶ	社会とかかわり、自分の考えを発信する	○地域で活躍する人へのインタビュー 事前学習(将来設計のためのマインドマップ、インタビュー方法の学習・練習)〜事後学習(まとめと発表)
3年	社会の中で生きる	問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む	○巣立ち教室(マナー、年金、税金などについて外部講師による講話) ○テーマ別講座学習(探究活動)

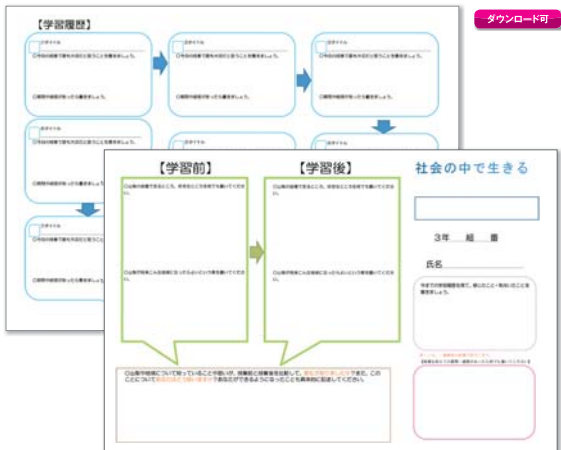
同校の「総学」の強みは、推進担当者

職員会議の数分間を利用し 生徒の課題点と対策を共有

「社会や地域が良くなることと自分たちは無関係じゃない、自分にもできることがあるんだと、生徒は体験を通じて学びました。それが生徒がこれから歩んでいく自信になるのではないだろうか」

を見比べると、自信、前向きさ、主体性、課題解決能力などの項目の伸びが目立つ。「私は自分に自信をもっている」との回答は48%から60%、「何か困ったことがある時にどこに問題があるかみつけれらる」は61%から77%に増えた(14年度3学年)。キャリア教育推進担当の研修部主任を務める古守やす子先生はこう話す。

図3 「総学」で使用したポートフォリオシート



昨年度の「地域」講座で使用したポートフォリオシートは、成果だけでなく学習プロセスも評価できる。今年度は他の講座でも使用する

深め、最後に全体で共有した(20分)。

「それだけの先生方が感じていることを言葉にすることによって再確認したり、共感したりでき、みんなでやっていきましたよ」という雰囲気になっています(古守先生)

例えば昨年度末は、月1回の職員会議の中のわずかな時間を使い、3回にわたって生徒の課題と対策を共有する研修を行った。初回は、全教員で生徒の問題点を付箋に記入。50人から150枚の付箋が集まった(所要5分)。それを研究研修部が分類し、次の職員会議で共有するとともに、今度は対策について同様に全員が書き出した(7分)。3回めはグループに分かれた議論で対策内容を

One Point 効果を高める指導のコツ

シンキングツールを使って「考える」を教える

協同で情報を整理・分析する際、「考えていることを可視化して共有することが有効」との考えから、探究活動のプロセスにおいてブレインストーミングやKJ法、マトリクス法などシンキングツールを積極的に利用している。ツールの活用を生徒に教えるためにはまず教員自身が身につけようと、昨年度はシンキングツールに関する校内職員研修会を実施。情報教育の専門家を招き、ワークショップを交えながら学んだ。

KJ法を使って課題設定の話合いを行う生徒



「二部の教員の取り組みで終わるのではなく、学校の特色として定着させ、生徒の成長に生かしていきたいと思っています(武藤教頭)」

また、良い実践事例は教員間で共有する動きがある。昨年度の「地域」講座で行われた、多様な情報収集方法・シンキングツールを活用した学習プロセスや、評価方法の工夫から学べる点が多い(図3)。研究研修部が主導して、この成功例を今年度は他の活動にも拡大し、指導の底上げを図っていく。